

「十字架前夜」

(ルカの福音書 23 章 1 節～25 節)

「あの人がどんな悪いことをしたのか。あの人には、死に当たる罪は、何も見つかりません。」(23:22)

仲森文穩

今日のメッセージ要旨

○イエス様の処刑は仕組まれた冤罪事件というべきでしょう。ユダヤの最高法院（サンヒドリン）は偽証を重ね、イエス様を「不敬罪」で断罪しました。ところが、彼らは総督ピラトに対しては、「騒乱罪、反逆罪」でイエス様を訴えました。同じ人の裁判なのに、訴え先によって罪名が変わるなんてあり得ません。ピラトは事情を察し、イエスを罪なしと判断し、鞭打って釈放しようと提案しました。ところが、訴えた人々は納得しませんでした。最高法院の裁判もピラトの尋問も（そしてヘロデの尋問も）一夜の間の出来事です。なぜそんなに急いだのでしょうか。おそらく、闇にまぎれて一切を終えるためではないでしょうか。早朝の公開裁判に集まった群衆の中には、イエス様を処刑したい人々の意をくむサクラが大勢いたことでしょう。

○「バラバか、イエスカ」どちらか一人に恩赦を与えると提案したピラトに、群衆は殺人犯バラバの釈放を求めました。群衆の声に従ったピラトを責めるのは酷かも知れませんが、彼のみがイエス様を救える立場にあったことも事実です。

歴史によると、彼は着任早々カエサル像が描かれた軍旗を持ち込み、偶像を嫌うユダヤ群衆ともめていますし、神殿の金を水道工事の費用に流用しようとして、1万人の群衆と衝突し、大勢を虐殺したりしてきました。ピラトにとって、これ以上のもめごとは立場上とてもまずいことでした。彼は強く出られず、結局イエスを十字架につけるしかなかったのです。イエス様は「されこうべ」（ギリシア語：クラニオン、アラム語：ゴルゴタ、ラテン語：カルバリ）という所に連れて行かれ、そこで処刑されました。重要なのは、イエス様が抵抗することなく囚われ、偽証を重ねる裁判でも一切自己弁護をされなかったことです。神様の力を発揮して危機を脱することもできたはずなのに、それも封印して十字架を受け入れていかれました。一体どんな意図があったのか、それが決定的に重要なことです。

○嘘で固めてイエス様を陥れた人々の罪は大きい。彼らは十戒の「隣人に関して偽証してはならない」「殺してはならない」という戒めを破りました。律法の番人を自称する彼らが自ら律法を破ったのです。他方、イエス様は十字架上で「父よ、彼らをお赦しください。彼らは自分が何をしているか分からずにいるのです」と祈られました。これほどの全き愛があるのでしょうか。律法ではなし得ない救いを惜しみなく与える、赦しの愛です。この祈りにこそ、イエス様が伝えようとした神の国の福音が輝いているのではないのでしょうか。

レントも4週目に入りました。私たちを愛するがため、イエス様が十字架の苦難を背負われたことに思いを馳せ、日々を送りたく願うものであります。